

試し読み

FUTURISMO

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

FUTURISMO

いかるがつみき



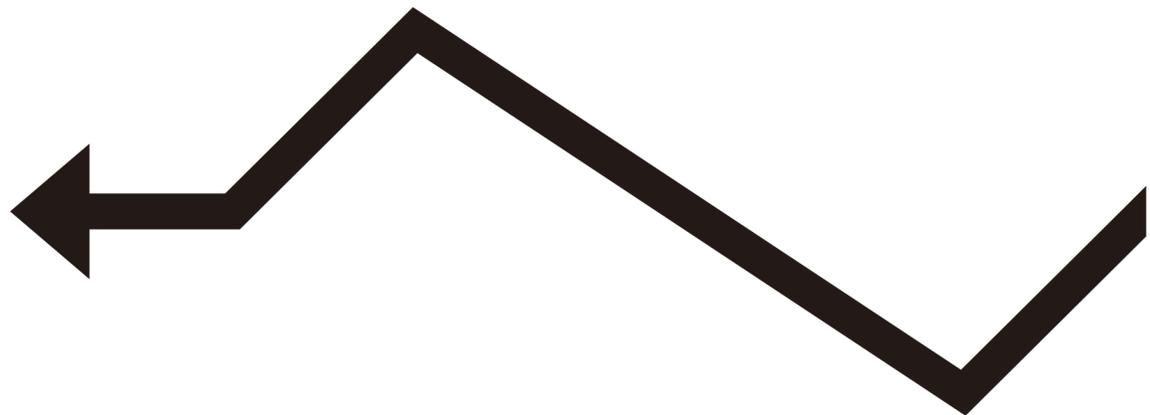
FUTURISMO

いかるがつみき

	FUTURISMO
67 捻る遊び	9 ニワトリ卵
74 修学旅行	11 融解
105 初心	14 クラウドロイド
109 OLインベーダー	20 等価交換
115 カエル、カタツムリ、 イヌの尻尾	23 マンタ
166 嘘の塗り重ね	27 ユビキタス世界
169 黒の塗り重ね	30 雲の絵ばかり描いている 画家
174 糖分の塗り重ね	35 確率

←		←	
←	267 砂糖	←	
←		←	176 知恵袋
←	272 悪女	←	
←		←	179 読書療法
←	277 みんながなりたい職業	←	
←		←	183 もこみち
←	306 春になると	←	
←		←	192 ぬくもり
←	309 方眼紙	←	
←		←	200 占い2
←	312 川面	←	
←		←	210 リビドー
←	329 ある未来派に由る 思想的破壊工作の一手段	←	
←		←	231 来夏00
←	333 未来派	←	
←		←	264 青い大学ノートと 黄色い大学ノート
←	FUTURISMO	←	
←		←	

融解



今日の午後3時付で静岡県は神奈川県に併合された。誰もが呆れていた。誰もが馬鹿らしいことだと嗤^{わら}った。しかし、たいていの人は思った、「仕方ない」のだと。

東海地方は融けているんだ。もう、どろどろに。だから神奈川県が吸収した。神奈川県静岡市になったんだ。

腕を組みながらなりたてる。「集中力が足りない」のだと。反駁はない。「やる気がない」のだと。もちろん、否定しない。「雑」だと。宜^{むべ}なるかな、反^{むべ}すこと葉もありません。しかし、バツイチにそこまで云われる筋あいはないと思う。

誰がこんな未来を予想できただろう。東海地方は融けているんだ。もう、とつくに。むきだしの岩は、ところどころマーブル状に鏤^{ちりば}められたクツキーチップのように。拡がる茶畑はミントの味。気付けに、ぴりりと、わさび味のアイスなんて、どうかしら？

自然な生え際よりも長い眉。桜エビ色に、無駄に赧^{あか}く塗りつけた頬。しらすのように飾り気のない地味なツメ。そして金目鯛のようなツラ。激昂してとげとげになる話の内容よりも、その表情の滑稽さに気が逸れる。だから、離婚するんだ。

暑い暑い冷房の季節に、アイスのように融けて、べとべとに、ぐにやぐにやに、あたかも蜜のように、とろく粘った液状に、静岡県は融けてしまっただんだ。

うつらうつらしていた。節電のために設定を上げた空調の所為で、眩暈がしていた。先週から便秘で、ストレスが溜まっていたんだ。云訳？ もちろん云訳。

名誉のために云っておく、静岡県が怠^{おこ}けていたわけじゃない。なんの罪もなければ、悪も行われなかった。だけど融けた。理由は判らない。もしかすると、ソドムとゴモラが滅ぼされたように、なにか超自然的な力が働いたのかもしれない。ただ、大地が神奈川県と融けこんだんだ。

融解

最終的に、「神奈川県静岡市」と書かれた伝票をデスクに叩きつけ、バツイチ主任は帰っていった。甘いバニラ味を頬ばってとろけていた3時の給湯室に、嵐のような破壊力。うしろ姿が、肥えた温室メロンのように丸い。

書き間違えた？ いやいや、もう、とろとろなんだ。生あたたかくなった、クリームのような乳質の濃ゆい液体になって、東海地方は融けだしたんだ。

嗅げば糖の薫り。おや、舐めれば蜜の味。

併合したにもかかわらず、県庁所在地は静岡市になったんだ。なぜか？ 富士山が近いからだ。



雲の絵ばかり描いている画家

また、あの人がきた。いつもおなじ色のチューブしか買っていない。ウルトラ・マリンとジंक・ホワイト。

知っている、あの人。向かいのマンションに住んでる。2つ上の階の部屋で、いつも窓を開けて外を眺めている。窓の傍そばに腰掛けて、空を見あげているんだ。

隣にはイーゼルが置いてある。筆を握っているのが判る。雲の絵を描いているのだろうか。でも、ジンク・ホワイトで雲は描けない。いや、白の絵の具だから、描けないことはないだろう。だけど、あれは淡い、薄い、儂い白。躍動する積乱雲を描くならば、チタニウムを使えばいい。ジンク・ホワイトでは、靄のようになるだけ。霧の絵は描けても、雲は描けない。

部屋が遠すぎて、彼の描いているキャンバスは見えない。そもそも、いつも裏側を向いているので、双眼鏡を持ってきても判らない。

彼はいつもおなじ姿勢で、おなじ空を眺めている。いつもまでも、おなじ絵を描き続けているようにも思える。

イオとゼウスの話を聴いた。ギリシア神話の神様だというのに、ずいぶん奔放な神様だ。ゼウスはいろんな女性に手を出していたらしい。イオを見そめたときには、雲に変化して誘惑したのだという。

次の日、彼はまた絵の具を買いにきた。ぱりつとしたポロシャツに、ジーンズ。ラフだけど、きちんと整った姿をしている。髭は毎朝剃るというわけではなさそうだ。ちようど2日目くらいの伸びかた。神経質そうな目。買っていくのはウルトラマリンと、ジ

ンク・ホワイト。

彼の描く雲は、きつとゼウスのようだと想う。淡くて、霧のように粒が細かくて、ガーズの生地を透けるように、薄いような気がする。忍びこんでくる。攫さらつていく。大氣のまにまに空を漂う雲とは違って、やわらかいけどきわめて能動的に動く海月のように、飛んでいるのだと想う。空から見おろして、運命の女性を見つけた途端、霧のように氾濫して、瞬く間に、包みこむようして、余すところなく攫さらつていくんだ。今日みたいに、雲と空の境界線の判らないような天候に日には、窓を開けていると、今にもゼウスの霧が部屋に忍びこんできて私に襲いかかってくるような気がする。だけど、きつと怖くはないのだろう。なにも気づかないまま、なにも抵抗しないまま、さらりと済ましていくに違いない。それで、穢けがれるのだろうか。それで、なにかが変わるのだろうか。きつと、ジnk・ホワイトを塗りこめたように、透明性のある白さで暈ぼけるだけ。

ふ、と彼がこちらに目を向けた。驚いて、私はカーテンに隠れた。彼もすぐにキャンバスに目を戻した。彼も少し驚いたみたいだが、振りかえったのは気まぐれだと判る。いつもの絵を描くときの目つき。なにごともしなかつたように、すぐにまた空を眺めはじめる。神経質な画家は、きつと私がいいつもの画材屋で絵の具を売っている女のコだとは気

づかなかつただろう。カンバスを見詰める彼の瞳は、なんだか神々しい。——どんな絵を描いているの？ やはり雲の絵だろうか。上ばかりを見つづける。雲を描くとき、なにを想うのだろうか。絵の具が、色彩が、雲に変わるよう想像するだろうか。筆がけぶるように気化して、そこから軽やかな雲が生まれていくのを想像するのだろうか。あるいは、じぶん自身が雲になることを想像して、シンクロしながら。彼は雲に姿を変えたりするだろうか。あの目が合った一瞬で、私を見そめて、雲になったりするだろうか。神は、青銅の地下室へ閉じこめられた女性のもとへも、変化して、逢いに行つたという。だから、もし雲に姿を変えるならば、鍵をかけたとしても、大気のふるえる早さで、すぐここへ飛びこんでこれるのだろう。彼は相変わらずカンバスの横から少しも動かない。だけど、なんとなく、私は窓を閉められずにいる。

夕方になると、窓を閉じる。窓の傍そばの椅子から離れ、どこかへ消えていく。夜中に明かりが灯ることはない。まさか、そのまま寝てしまふとか、どこかに出かけて、朝まで帰らないとか。彼が仕事をするのは、10時から4時まで、昼のあいだだけ。雨の降る朝は、窓の傍そばに現れて、空を見あげ、悲しそうに眉をひそめながら奥へ帰っていく。やつぱり、どう考えても雲を描いているんだ。ほとんど窓の傍そばで動かない彼。観察している時間が、筆を動かしている時間よりも遙かに長いように思える。描くというよりも、ま

るで空のなかに入っていくように。それが画家の技法だろうか。不毛なくらいたくさん時間をかけて、感じとるのが芸術だろうか。ずっと未来も、あの人はおなじ絵を描き続けているように思える。あの人の瞳には、なにがどう映っているのだろう。

朝、いつものように座っている姿を見た。帰ってきて、まだいつものように座っている彼を見る。まるで時間を飛びこえているように、おなじ姿。

雲を描くために、雲以上のなにかを感じとろうと目を凝らしている姿。その姿を見ていると、むしろ彼自信が霞んで、粒のように淡く、儂く^ぼ暈けはじめているように感じる。雲に。日中、カンバスのまえで、彼は雲になる訓練をしているんだ。私はそのあいだ、そつと窓を開けて、閉められずにいる。

F

確率



「アレ」って云ったら、コレだし、「ソレは」って云われたら、いつもの曖昧なはぐらかし、「コレは」って云ってきたら、いつもの^{げんがく}術学的な物云いだろうし、「ドウかな」って訊かれたら、きつと背中を押して欲しい合図だ。「アソコで」ってメールが来たら、角の喫茶店の奥の席で、いつもの時間に待っていればいいんだなって思うし、「コレを」って

背中に隠していたのは、なにか、驚かせるような気まぐれのプレゼントだったりする。ナニも云わずに、ただじつと見詰めてきたら、ああ、アノことかなって……それに、ドウ・コウしなくても、決まっつて寝るまえには電話して「オヤスミ」を云うルールにしてるんだ。

だけど、このまえ、ソんな話をコンな感じで話していたら、「ソウじゃない」って云われた。「じゃあ」、コウだろうと思つたら、「ソレも違う」って。アレ？ コレ？ 急にこんがらがって、ドウにかしようとしていたら「いつたいナニやつてるの」って苛々された。

別に、ツウカアつてことでも、アイ・コンタクトつてほどでもない。だけど、自然と通じあっている自信があつた、ドコか。でも、ソウいうのは、意識してやっていることじゃないし、こと葉にして話しあつたわけでもない。箇条書きにして書き残してあることでもないんだ。変なの。つきあうときは、お互い、顔を真つ赧かにしなから、なんとかこと葉にして始めたのに……

ソウ思つたら、ドコか、ナニもかも、アレもコレも、よくなくなつちやつたんだ。

「部屋でランダム再生にして流してたんだけど、おんなじアルバムの曲ばかり掛かんの。電車のなかでも、おんなじアルバムばかり」

偶然なのかもしれない。違和感を感じたこのまえ、たまたま私が受けとり間違つたの

かもしれない。ただ、それだけなのかも。アイツは俯いて、傷だらけになったプレーヤーに巻きついたイヤホンのコードをなおしながら、ついてくる。

「あ、電池きれた」

「ソレ、なん年つかってるの？」

生まれたての子犬のような初々しきで始めた関係が、6年目の春に、老犬のようによたよたしだした。ただ尻尾を振るだけで会話をしている。ソレはソレで、陽溜まりの縁側でのんびりしているようで、なんだかほほえましい気がするんだけどな。だけど、ナニをするにも新鮮みが無くなってしまっているのは事実。

「新しいのもいいんだけどさ。容量おおきいし」

「買えばいいじゃん」

「音が悪かったんだよ……ナンか」

イヤホンだけ真新しかった。ちよつと不釣りあい。ソレにしても、拘るほどの違いなんてあるのか判らないのに。

心情、ナニもカも新しいもののほうがいいわけだ。新鮮だし。初々しい。肌艶とか、絶対綺麗。ドコモカシコも、アレだつていいはずだ。

「このイヤホンも前使っていたものとおなじやつ買い換えた。コレが一番いいんだよ」
「男の人って、そういうところ拘るよね」

私から云わせても、おなじなんだけど。新しいほうがいいって。若くて、格好よくて……なんて。

「映画、なん時からだっけ？」

でも、きつと、なんでも真新しいものに換えてしまうのは面倒なことなんだろう。ほんの些細なことでも。勝手を知っているほうがラクだ。アレ・コレ、痒いところに手が届く感じで。理想を云ってしまえば、お互い、若く戻ればいい、ソレこそ、初々しくて、肌艶いいところに。

「ねえ、今日の、本当に観たい？ 無理してつきあってくれなくても善いよ」

「え？」

「情」とかいうのかな。長くつきあうのつて。好きとかナニやら浮ついた気持ちもろがコレに移り変わったんだ。たぶん、当然のこと。だけど、我にかえったとき、脆もろい。愛だとか、恋だとか、熱を伴うものに比べてしまうと。

「いつもソんなこと訊かないよね」

アイツ、不思議そうな顔をして云った。あたりまえのこと。でも、考えればだんだん鬱々と、どんどん沈んでいく。うん。コッチだつて、コンナになつてしまつたのが不思議なんだから。

この日観た映画は、先週の情報誌に載っていた、名前を知っていて割合有名なヤツ、のリバイバル。案外単純な筋で、意外性が無い、と云えば、無かった。

「コーヒー、好きだった？」

「うん……気分」

ナニもカも知った気でいたんだ。私も、アイツも。ソレが間違いか。6年。だけど、さ。タツタ6年。考えてみて、人生の4分の1にも足りてない。ソウ捉えたら、意外と少ない気もする。ソレでナンでも判ったつもりでいるのも烏澁おこがましいのかも。

「ナンで昔のことって憶えてるんだらうね」

「え」

たまに真面目になる。いつもテキトーなくせに。

めずらしく、パンフレットなんて買って眺めている。頬杖をつきながら。今日の映画、ナニがよかったんだらう。コーヒーと炭酸。そういえば、私とアイツは、マルで趣味が合わないんだ。

「時間が経って、身体も歳をとるけどさ。頭ん中って思ってるより歳をとらないと思うんだよね」

過去にすれ違った男の人と女の人が、巡り巡って、再び出逢う。ふたりは昔の姿と今の姿に哀愁を感じ、そのまま――

「みんな、いつまで経っても若い気でいるよね。それは、頭のほうは成長が遅くてさ、身体についていっていないワケ」

再び愛しあつたふたりの男女は、矢鱈と美男・美女過ぎた。台詞も素敵過ぎて……「ソレ、取って」とか「アレでいいや」とか、洗練されすぎて磨りへつたこと葉を使わない恋人たちなんて、現実味がない。

「楽しい記憶って、歳をとる。憶えてるから。だけど、つまらないこと、身体にしんどいこととかって、繰りかえして起こるくせに、記憶に残らない。すぐに過ぎていく。ソコが抜けおちたぶん、頭は身体より成長しないんじゃないかな」

U

たまに、妙に説得力ある見解を出してくる。

ソウ……多分、ソウなんだ。だんだんと記憶は白黒になっていって、いま過ごしている時間は、その、退光しやすい部分のできごと。だけど、哀愁やら、思いいれやら、印象深いことだけアレ・コレはつきり浮かびあがって、鮮やかに思いたす。綺麗な過去を憶えているからつまらないんだろうな。くらべて、物足りなくなるなるんだ。たしかに、楽しい時間は心の中に残ってる。頭の中では、アノ、楽しかった時間を積み重ねて、成長しているのに、今はなにも積み重なっていない、成長しない時間。ずいぶん停まったままの感じがする。時間が経てば変わっていくことなんて判っているのに。でも、空白が長すぎるとつらい。